

学びのコミュニティ研究会 13

平成27年8月9日(土)
13:00~16:00
泉川公民館 研修室

会長 挨拶 讃岐 幸治

今年度初めての会である。地域を巻き込んで、放課後の子供たちの居場所を考える。また、高校生の活動、高齢者問題と盛りだくさんである。

今年は、地域教育実践交流集会とともに文科省からも補助金をいただき、注目されるところとなる。討論も含めて、盛り上がった会にしていきたい。

参加者 30名

進行 新居浜市役所 大西総合ファシリテーター

1 放課後の子どもたちの居場所を考える

スミセイアフタースクールプロジェクト 平岩氏

住友生命新居浜支社小川氏 挨拶

午前中に泉川小学校の子どもたちと体験活動をした。

社会貢献活動の一環で、未来を強くする子育てのあり方だと考えている。子どもたちの放課後をもっと楽しくさせることを目的とし、放課後にスポットを当てて地域社会へ積極的に取り組んでいきたい。



現在、全国50か所でこの事業を紹介している。その他に100件ほどの応募があるが四国はなかった。本日は新居浜からの要請があり喜んでいる。

アフタースクールには、かかわりを持とうと思ってくれる人がきてくれる、多様な活動である。テレビゲームより楽しく、塾よりは学べる放課後をつくりたいと考えている。

一例を紹介すると、小学校の子どもたちが、守衛さんに家がないので家をプレゼントしたいという希望があったので、建築士にお願いして、設計と大工さんを紹介してもらうことにした。紹介された大工さんは頑固な職人で、「子どもなどには教えられない」と断られた。その後、3回ほど通い、やっと「しつこいから1回だけ行ってやる」と小学校に来てくれたが、子どもたちが棟梁、棟梁と慕い、きちんと挨拶するのを見て、かかわってくれるようになった。1年半の時間をかけて家を建てた。現在、2件目に挑戦している。

このような活動をしてくれる大人を市民先生と呼んでいる。他には、編み物、お茶、料理、日本語、IT、大学訪問、外国人と国際交流等の市民先生がいる。必要とあればどこでもでかけていってくれる。

ITの学習で大学へ行ったときなど、大学生が自分で授業が選べて自由に休めることや、自分の好きなものが選べる学生食堂があつてうらやましい、早く大学生になりたいと参加した子どもたちは言う。放課後にやりたいことをしながら、教育活動に子どもたちを巻き込んでいくようにしている。

衣食住というテーマを決めてやりたいことを叶えるというジャンルでは、3月に1日だけ、子どもレストランを開店している。開店するという目的のために子どもたちもがんばることができる。また、町の歴史に詳しい人の話を聞きながら町歩きをしたり、みんなで風船バレーをしたり、手作りで楽器をつくって演奏したり、外国の人には、その人の母国でしている子どもの遊びなどを教えてもらう。

学び、遊び、表現では、命について学ぶ。赤ちゃんのことやペットのこと、ペットの障害が増えていることなど、命の大事さを伝えている。また、お年寄りには商売のことや、昭和の遊びを教えてもらっている。

やりたいことは400種類ほど。こどもたちがこれをやりたいといえば、どんどん増えてくる。ときには、有名人もきてもらうこともある。

遠足には、大学、ミュージアム、企業、お店等、興味のあるところへ行く。

多様な活動を通して、子どもの短所を直し、いいところを伸ばす。「いいところノート」を作成し、スタッフがメモをし、毎月表彰している。

このような取り組みをしようと思ったきっかけとなったのは、長女が生まれてからのこと。2004年、下校中の子どもの連れ去り事件が多発した。事件は、15:00~18:00ころに70%。放課後がおかしいと興味を持った。

放課後に外で子どもが遊ばない。子ども同士では公園に行けない。学童保育の問題もある。外的環境と共に、子どもの高い孤独感、自己肯定感の不足など内的な問題もある。日本の子どもが孤独だと感じている割合が3割、高校生に自分は価値ある高校生かと聞くと、はいと答えた高校生は8%しかない。自己肯定感が少ないのが日本の子どもの特徴である。

また、現代は、地域の縁が希薄になっている無縁社会。隣にだれが住んでいるのか知らない。東京では家の前にごみがおちていても、役所に連絡する。なんでも電話で、アウトソーシングの時代。子どもが公園で遊んでいると、ご近所から騒音といわれて裁判になった例もある。

少子化の主な原因は、子どもができると不安になるということ。要因の第1位が子育てにお金がかかりすぎる。自分、配偶者が高齢というのが2位、子育てしながら働く環境がない位。この不安を解消して希望に変えていく。地域で子どもを育てるという環境が必要である。自分がそのつなぎ役になろうと思った。

住友生命株式会社が、日本全国でその活動を増やしていこうとしている。スミセイアフタースクール第3次募集をしているのでぜひ応募してほしい。

活動の効果としては

子ども→友達と遊べるようになった。

親→仕事が安心してできる

地域→子供と遊べて楽しい。

子供たちが望む放課後とはなにか、夏休みにしたいことは何か聞いてみた。

5位は、なし、なんでもいいという回答。親が決めた場所に行くので、自分でどのような過ごし方をしたらいいのかわからない子どもが増えている。4位はなわとび、3位鬼ごっこ、2位ドッジボール、1位サッカーだった。

高学年になるとなにもなしが2位。東京のほうでは、ほとんどの子どもが塾にいらっているそのような回答になるのだろう。面白い回答としては、温泉に行く、大根ぬき（遊び）恋バナ等、書いてくれた子もいる。

午前中に泉川の子どもたちにも聞いてみた。 みんなで楽しく遊ぶ、魚釣り、なし、たくさん旅等。いままで一番嬉しかったことなどのアンケートもとった。初めてのホームランを打って、偉いねと言ってくれたこと、8歳の時に妹が生まれたこと等。子どもの心に何が残るかということ、身近なことであって、そのことに感動している。自分でやって乗り越えたことなどをよく覚えている。

隠れ1位となったのは、友だちとみんなで何かをしたいということ。だれとやりたいか。今の子どもは友だちと遊ぶ機会が少ない。多くの友だちと過ごせる放課後をつくってあげたいと思っている。また、地域で子どもを育てる環境をつくり、地域の人が子どもたちにかかわる環境をつくる。そうすると、町を歩く子どもがわが子のように思えてくる。自然発生的には生まれませんが、つなぎ役がいると生まれやすくなる。

午前中のスクールでは、星や宇宙のことについて学んだ。星に興味のある子がたくさんいた。いろいろな気づきがあったようだ。

東京の子どもはお金を払って習い事をして、常にお客様になっている。新居浜の子どもたちは素直ないい子がたくさんいる。育ててほしい。



関：東京の方で、このような活動が広がっている。愛媛でも、つなげていきたい。

大西：地域づくりを行っていく上で、相手の気持ちを感じるという、気持ちの部分理解できていないといけない。大切なことだと思う。知識としてだけだとなにもならない。手段として、なにがヒントとなったのか。また、先生が嬉しかったことは。

A：嬉しかったことは、2014年6月30日に子どもが生まれたこと。それがきっかけでなにもないところから、この活動を始めた。最初になにをつくったかとの質問については、アメリカでは学校でアフタースクールをしている。その活動を知って日本でもしようと思った。市民先生を探して、学校に連絡し説明に行ったが断られた。それで公民館で始めることにした。2年間、公民館でアフタースクールをしたが、3年目になってやっと、学校でもできることになった。公民館は週1回だったが、ここでずっとやってもいいかなあと考えていた矢先だった。

Q：泉川では土曜日だけでなく、放課後もとりいれた活動をしたいと思っている。しかし、学校と家が遠い子どももいるので、難しいかなとも思う。

A：課題の多いのは放課後。土曜日は企業も参画しやすい。公民館まで家が遠いのはたいへんだが、1時間でも来てもらえればいいのではないかと。学校だとみんなにチャンスがあるかなと思うが、先生の方が来てくれるなどということもある。いろいろ居場所があって子どもが選択していけるようになればいいと思っている。

大西：結局、人と人のつながり。どの程度たくさん人脈をもっていて、どれだけ広がっていくかということ。学校の先生もこの席には来られていると思うが、先生の立ち位置としてはどうか

Q：常に、教員が立ち会わなければならない、セキュリティのことなどがあると、仕事が増えるからと拒否しがちだが、そうでなければ大丈夫という土壌ができてくるのではないかと思う。そのところをはっきりさせれば。

A：うまくいかないのは、ボランティアベースだけでやってしまうと、先生に負担がかかってしまう。学校の役に立つという形になれば大丈夫。小学校で、先生がどんどん入ってくださいと言うが、入り方が分からない。

日曜日の午後、スポーツを単独でやっているが、何をしたいか子どもたちに聞いてみると、「鬼ごっこ」だと言う。主体を子どもにおいて授業を展開していくのはいい。

Q：アフタースクールの発想は面白い。地域で子どもを育てるのに、地域の間が子どもにかかわるのはいいが、地域の大人のネットワークがもっと広がらないと。その広がりをどうつくっていくか。日本伝統の地域力は立ち上がってこない。どう超えていくか。日本の課題。松山市の生石地区は、30人近くの地域の人がかかわって「放課後子ども教室」を開催しているが、地域性とは程遠い。子どもと30人の大人とのつながりはできたが他の地域の人とのつながりはない。

A：ビジョンを共有して、地域向けの発表会をする、機会をどんどん広げていくしかないと思っている。やればやるだけ、ネットワークがよくなる。

Q：広報的な活動を広げていくのも1つの手ではある。さてそれで、地域のネットワークがほんとは出来ていくのか、もう1つなにかがいると思う。

A：全世代がつながりあう、地域コーディネーターの必要性。長期的な見通しでやっていかないといけない。

実践事例発表

① 今、高校生の私たちに何ができるのか「わたしたちが創る未来へ」

高校生ボランティアサークル May

May のネーミングは、最初に集まったメンバーの頭文字をとったもの。地域交流と福祉活動を中心に活動している。

「高校生である今だからできること」はなにかとメンバーで考えた。

様々な地域団体とコラボし、異業種交流をするにはと、

交流一大体験ゾーン in 新居浜「わたしたちが創る未来へ」というテーマで、平成25年1月、新居浜市総合福祉センターにて、企業・地域・高校等が一堂に会しイベントを開催した。

カンボジア文具寄付のためのチャリティとして、市政だより、フェイスブック、ブログ、チラシ等でPRし、経費等についてもメンバーが予算立てをした。1年目は、麒麟福祉財団の協力を得て、2年目からは場所を新居浜市商業振興センターに変更、今年で3回目となるが、自費でボランティアとしては謝金を受け取っていない。

第2回目の目玉は、新居浜今昔物語。温故知新プチツアーと題して、街歩きをした。書道パフォーマンスも好評だった。

今年は、グレース幼稚園による和太鼓演奏。高津小学校合唱。みきゃんと記念撮影など。

サークルMayの11人がきめ細かく計画し、新しい人たちと新陳代謝しながら、イベントをする。来訪者が喜んでくれると嬉しい。私たちのエネルギーは「ありがとう」という言葉である。



3人でつくった高校生ボランティアグループMayは、卒業したけれどやめるにやめられなかった。それならば、組織化して団体として動いた方が動きやすいと、高校生主体で、年生が抜けた人数分、1年生に入ってもらうことにした。今年も、人11集まった。1つの高校だけではなく、新居浜市全

域で広げたいと思っている。最近では、中学生も巻き込んだらどうかという話も出ている。いろいろなつながりが、自然発生的に生まれた。そうなる仕掛けは必要かもしれない。イベントは、行政がサポート役になってくれている。

Q：新居浜市の魅力はなにか、また、高校を卒業して進学や就職で一度出て行っても帰ってきたいと思うか。

A：人が温かい。進学等で新居浜を出てもまた帰ってきたいと思う。

Q：子供たちが帰ってきたいと思えるまちづくりをしていなくてはいけない。あの地域で子育てをしたという思いをもってもらいたい。

May 保護者：ゆくゆくは親子でMAYをしたい。少なくともMAYに参加した子は新居浜に帰って子育てをしようと思う。

Q：このイベントは高校生のアイデアが活かされたもの。こんなの無理だなと思わなかったのか。

A：無理だなとは思わず、「できる」と思ってやった。できなかったことは、他の高校も呼びたかったが、先生の引率ということもあって実現できなかった。

Q：忙しいと思うが、親の反応はどうだったか。

A：両立させた。成績が落ちたらMayはやめるということになっていた。

Q：参加団体をくどきにいくときは誰が行くのか。

A：Mayがした。

Q：企画するのが楽しいのか、直接かかわるのが楽しいのか。

A：直接かかわるのが楽しい。

② 公民館を拠点とした高齢化社会克服プロジェクト

新居浜市立泉川公民館

泉川まちづくり協議会 篠原 茂氏



地域ぐるみで健康寿命を延ばし介護保険料を減らそう

地域福祉活動が前例踏襲型、各種団体の縦割り意識が強い、受益者感覚が強く行政依存体質であることが弱みの、泉川を自分たちの力で変えていかななくてはならないとこの事業に取り組むことにした。

新居浜市は、介護保険料が全国9位で高い。健康保険医療費も国平均が311,899円、愛媛県が341,959円のところ新居浜市は381,049円で国平均と7万円もの差がある。この状態をどうするか。健康寿命を延ばし、介護保険のお世話にならないようにしなければならない。

公民館が中心となり、地域住民と共に「学習」して「実践」につなぎ、地域全体が変わっていく必要がある。そのためには、公民館は総合事務局となってつなぎ役になる。自治会や各種団体の町づくり協議会と連携する。協議会と公民館がうまく重なるという印象である。泉川がよくなる活動は公民館主体である。自治会の事務局は公民館ではなく、まちづくりの部会。何かをしようとした

ら、まず、自治会にお願いして、まちづくり協議会で知恵を出してもらい、動員してもらおう。表と裏の関係である。

介護保険料が高いのを、毎日の生活で改善をしなければいけないと思う。

現在、行われている事業としては、健康づくりE x ウォーキング（1日8,000歩運動）9つの散歩道を中学生が選定・E x モニターが活動量計を装着して効果を測定したり、また、泉川「健幸隊」を結成、高齢者の社会貢献活動として、高齢者の知恵や技術を子どもに伝えたり、自治会館を利用して「シルバーサロン」の開催、傾聴ボランティアの育成、公民館運営審議委員が健康づくりのよろず普及員となり、保健センターの保健師から学んだことを各種団体を通じて伝達したりしている。

健康寿命延伸は全国的な課題。後期高齢者はこの運動にどのくらい参加しているか。

泉川で50人ほどだが、長野県須坂市では1,000人ほどの人が健康診断を受けている。先進地を訪問して情報交換も積極的に行い、泉川地域住民にアンケートを取り、どうすればみんながその気になるか、啓発活動も並行して行っている。

これらの取り組みによって、老人会が活性化し、まちづくり協議会の各部会が連携してきた。また、行政とも協力することができた。

目指すのはみんなが幸せを実感できるまちづくり、公民館は「幸民館」として展開していきたい。

Q：年寄りの健康寿命を延伸させるための泉川の運動、個人ではとてもできないこと。広めるためにどのようなアイデアがあるか。

A：デイサービスは介護保険を使って1日1,000円、でも、本当は10,000円、9,000円は税金である。自治会館でカラオケでもして、300円で過ごすことだってできるので、そのようにもっていきたいと思っている。また、泉川公民館区は小学校が1つ中学校が1つなので連携にはちょうどいい。

Q：松山は、1つの公民館で5つの小学校を抱えているところもある。松山市は女性が多いが泉川はその逆。自治会館を利用して分館単位でするのもいい。顔がわからなければつながりようもないから。

A：今後は、栄養士さんや医師会とも連携するといいかもしれない。デイサービスにいくよりも、公民館で子どもと遊べるようになればいいと思っている。

感想およびフリーディスカッション

- ・今治在住教員の話。小学生の児童に夢を持たせることを目的に、地域の人たちとかかわりをもつ行事を企画した。授業はつづせないので、昼休みの時間、高校生（地域に高校がたくさんある）に来てもらい、その技能を披露していただいた。交渉は、校長が高校へ行ってお願いした。高校生は授業をつづさなくてはならないので。高



校生は小学生に話すので、事前に練習をして分かりやすく伝える努力をしなくてはいけなかったようだが、それがいい勉強になったようだ。なにをしたかという、調理科の生徒にシェフになってもらって料理、なぎなた、空手、ペットボトルロケット等。地域の人にもお琴や狂言もしていただいた。地域の人や高校生にとっては、アピールできる場ができてよかったようだ。

- 高校生ボランティアグループMayの活動がよかった。
- Mayの活動のおかげで、Mayがあるから、高校に行っているという子もいた。高校生という時代はとてもいい時代。企業も高校生というだけで、安価で引き受けてくれる。活動があるから、忙しい中でも学業もがんばれるようだ。
- アフタースクール、放課後毎日預かって大変だと思う。松前町も、週1でやって、危険性と責任を感じていたが、今回の話で、エネルギーを一杯いただいた。がんばっていきたい。
- 大人の高校生の事業のかかわり方、行政は何もしない方がいいのかもしれない。行政の求めるものと地域の求めるもの、プロセスとして話し合いは必要だろう。
- 高校生の活動、大人からしなさいでは長続きしないだろう。話し合いの機会は大人にも必要。何もないところから組み立てるのは難しい。

